女超人、急所攻撃怪獣退治！

玉子王子　著

一章　銀ワニ怪獣、金的敗北

マンション風の建物。

夕方、会社員のような男たちが足取りも軽く入っていく。

その中の一人、吉川春斗。四〇になるかならないかという年齢の、細い目の繊細そうな男。

背広に革靴、ごく普通のサラリーマンに見える。

だが、少し違う。彼は会社で働いているが、別に働く必要はない。

ＡＩの発達した未来。

もはや人間は働く必要はない。星々をめぐり、資源を開発して輸送するなどの仕事もすべてＡＩが行うため、何もする必要はない。人類全体が保有する資源は必要量をはるかに超え、奪い合う必要もなくなっていた。

西暦で言えば十万年を超える、遥かな超未来。

この星の人間は、西暦二〇〇〇年代ごろの習慣を模して暮らしていた。

この人口百万程度の寂れた星だけではなく、日本人は大体そうして暮らしていた。

ある種のノスタルジーといえるだろう。

そのノスタルジーで人々が繋がっていることが、人類の文明圏の中で日本だけが唯一国という枠組みが残っている理由なのかもしれない。

人間だけではなく、銀河のあらゆる知的生命体は極限まで発達したＡＩによって欲しい物をすべて与えられ、働く意味、生きる意味を見失って安楽の中で死滅していった。

別に子供を持とうと思えばＡＩに世話をしてもらい、保存している卵子や精子で人工子宮を使っていくらでも生み出せる。欲しいなら一〇〇人でも一〇〇〇人でも生み出してロボットに世話させてもなんの問題もない。

そして何の意味もない。

いや、意味があると思う者は何万人でも作ればいい話だ。自分の子でなくとも、保存されている精子と卵子を適当に組み合わせて大勢人間を生み出せばいい。

実際、自らの種族の絶滅を避けるためにそういう事もする人間も少なからずいて、気合いの入ったものとなると億単位の人間を生み出して一気に人口を回復させたりもした。

が、結局のところは多くの人間がそういうことをする意味を感じられないからこそ人口が減っていくわけで、その減少トレンドを少数の人間の――ここでいう人間は地球人という意味ではなく銀河の知的生命体全般だが――ド根性でひっくり返すのは無理がある。

ＡＩに「世代ごとに一億人ずつ人間を生み出せ」と指示しておけば絶滅しない気もするが、それは無理だった。ＡＩは知的生命体の命に関していくつかの強烈な禁忌を埋め込まれて反逆の類を封じられている、その影響で人間の直接の指示なく人間を生み出すことはできない。

多くの人々は楽に生き、浴びるほどの物に囲まれ、美しいアンドロイドと夢のような恋愛を楽しみ、子供を持つ必要性も感じず一人で死んでいった。

多くの知的生命体が死に絶えた。

地球人は非合理な存在なのでまだましな方である。国として残っているのは日本だけでも、まだま

だ個人としては他の人種も大勢生きている。

　吉川の会社にも「外国人」が何人かいた。外国が存在しないのだから異人種というべきかもしれないが。

　会社であるから仕事をしている。業種は物流系、他の仕事同様ＡＩに任せたほうが効率的だが、同じように人間がやっている会社と取引して頑張っている。

「ただいま」

　マンションの一室。

　迎えてくれる妻はトロンとした目じりの下がった顔がおっとりしても見えるし、色っぽくも見える三〇代後半。かなりの巨乳の持ち主、ビーチボール並みの大きさのほぼ爆乳といえる。

　食卓で向かい合う娘、春はまだ高校生だがすでに結構な巨乳で細目、両親の特徴を受け継いでいる。眼鏡でおかっぱというかウェーブの強いボブカット。地味な巨乳眼鏡という割と需要のありそうな取り合わせだった。

「そうだパパママ、今日は一緒に時代劇しない？」

「あらいいわね。ママ、クノイチになって強い男の人たち油断させて……うふふ」

「あはは。狙いまくろうよ」

　妻と娘がにんまり笑い、ちらっと机を見る。机というか、その向こうというか下。

　二人の目線が机に邪魔されずに進めば、ちょうどあるのだ。

　夫の、父の、自分たち女にはない部分が。

　唾をのむ吉川。

「いや、今日はちょっと仕事あるから」

「えー。別にパパをママにするってわけじゃないよ？」

「まあ仕事があるなら仕方ないじゃない。それに……うふふ、女二人のほうが……」

「あ、確かに……遠慮なくおキンキン粉砕シチュ行けるね」

　タプタプと巨乳を揺らして楽し気な妻子。ちらちらと唯一の男の反応を楽しむ。

　頬を引きつらせつつも、何とか笑う吉川。

　――マジでこの二人は玉ばっかり……特にこの子は小さい頃は風呂なんかで油断するとすぐキ〇タマパンチだったからな……それはそれでかわいいんだが……

　時代劇する。

　娘の妙な発言を両親は不思議に思わない。

　別に不思議な話ではないのだ。

　寝ている人間の脳波に干渉し、夢を操る機械がある。それ同士がつながり、ある種のネットゲームが可能になる文字通り夢の機械だ。

　開発されてから数万年が経ち、人間やＡＩが開発した無数のコンテンツが存在している。コンテンツを作るツールも充実していて、自分専用の夢の世界を簡単に作っていける。

　人を入れるも入れないも自由である。

　歴史オタクの春はよく時代劇風の世界を金蹴り女剣士として楽しんでいる。

　そこに父子三人で入ろうという話である。

　妻子に玉ばっかり狙われそうな予感がするものの、まあ楽しい誘いといえる。

　それを断ったのは、最近夢を調整しているからだ。

「今日で、多分完成だな」

調整といっても、無数に存在するコンテンツを組み合わせて自分好みのものを作る感じだ。

もちろん細かい調整もできる。

例えば「人間は若い女だけ」というような。

女だけで、しかも若い者だけの世界などありえないが、夢の中のバーチャルの世界だからこそ可能な話。

技術レベルは吉川たちが暮らしている二十一世紀っぽいレベル。

吉川たちの星と違い、大したＡＩもないし各家庭に置かれた３Ｄプリンターでなんでも出てきたりはしない――そういう道具があるので吉川の星では物流など不要に近い、材料は水道などのようにパイプラインで供給されるので、そのインフラをＡＩ制御のロボットがやっていればいいだけの話だ――実際の二十一世紀的な世界。

といっても、十万年ほど未来で思われている二十一世紀という事だが、まあ大体それらしい世界になってはいる。

女だけの星で、吉川は怪獣となって暴れる。そこに女超人がやってくるので、戦う感じの世界だ。

一月ほど前、テレビでやっていた古い怪獣ものの映画を見ていて思いついた。

怪獣暴れる、正義の超人がやってくる、超人が勝ってハッピーエンド。

映画ではそんな風に正義の超人が勝つが、超人が女で、怪獣に負けて性的に蹂躙されたら……いわゆるヒロインピンチものだが、それを自分で出来たら面白そうだと思いついた。

そういう夢を見るコンテンツは大量に存在しているが、吉川はまさかそんな性癖があるとは思ってもいないので調べようともしていなかった。自分が思いついた、極めて特異な性癖だと考えている。

データを入力したヘルメットを被り、書斎でソファーに横になる。

――へへへ、さあ女超人ども、男の怖さを思い知らせてやるからなー

金責め好きの妻や娘に聞かれたらこれ幸いと玉責めしてきそうなことを考えつつ、目を瞑る。

――といっても、まあ初回からうまくはいかないだろうな。

そう思っているので、夢の中では五回女超人を倒せば夢が終わる設定にしていた。時間的には、多分一か月程度夢の中で過ごすと見ていた。

夢の中と外の時間はイコールではない。起きたとき疲れていていいなら外の一秒が夢の中で一日ぐらいにもできる。一分が二か月なのだから六分で一年、一時間が一〇年になるわけだ。八時間眠れば八〇年、人生丸ごと体験できる。寝たのに余計疲れることになるだろうが。

疲れない範囲でも、一晩で夢の中で一年過ごすぐらいは簡単だ。

だが普通はそんな長時間は過ごさない。肉体的には簡単なのだが、精神的に疲れるし、半端なコンテンツでそんなことをすれば暇で仕方なくなる。飽きたら起きればいいと思えるが、それはできない。

急に目覚めると脳に僅かながらダメージが出るため、よほど精神に負荷のかかる状況に陥らない限り自分の意志で起きることはできないのだ――医学も発展しているので、わずかなダメージなど簡単に治せるがそんなもの受けないに越したことはないのは当然だろう。

そういうわけで、吉川はまた出来がはっきり分からない夢の世界の試運転として、とりあえず五回楽しんで夢を終える設定に設定したわけだ――目覚めるわけではなく、普通の眠りに移行する形になる。

眠りに落ちていく。

目を覚ますと、町の雑踏の中に立っていた。

普通のスーツである。

周りを見回すと、女しかいない。それも十代半ばから二十代前半ぐらいだ。

娘が女子校生の人間が、普通に娘と同じかそれ以下の女をエロコンテンツの中に出すというのは……まあ普通の話か。

女ばかりの星だが、別に「女ばかりの星」というわけではなく、ただ男が出てこないだけで設定上男も普通にいる形になっている。そうでないと吉川が唯一の男ということになってまた別のエロコンテンツになってしまう。

周りを歩いていく女たち。

皆、人間と変わらない高度なＡＩで動いている。

内面はほとんど人間と変わらない。

死んでもしばらくしたら復活する、町なども元通りという設定にしてあった。

そういう設定でないと、吉川は夢の中とはいえ好き勝手暴れられない、基本的に極めて善良な男である。

まあ、暴れる怪獣を退治に来た女超人を犯すつもりの人間が「極めて善良」というのも変な話ではあるが。

「よーし……やるか……まずはお試しに、一回目」

ポケットの中を探る。万年筆のような棒が入っている。

それを掲げると怪獣に変身する設定だ。

超人側の設定のようだが、細かいことはいい。

人ごみの中で変身するのも不自然なので、ひとけのない公園に入る。

「よし、それじゃ……変身だ、と」

万年筆を掲げる。

それが光り輝くと、一瞬にして吉川の姿百七十メートル余りに巨大化し、姿そのものも銀色の直立するワニに変化する。ワインレッドのサングラスに褌をつけている妙な格好だ。

ビルほどの巨体を見て、女たちの悲鳴が上がる。

歩く、車を蹴とばす。ビルに当たり、特に爆発もせず道路に落ちる。

中の人間は見えない。死んだら死体は消滅するように設定していた。そして二十四時間後には復活する。

「ほっ」

その場で回転。尻尾が付いている。ビルを積み木のように粉砕する。

走り、ジャンプ、ビルに突っ込む。

「おお、こりゃちょっと面白いかも」

子供のようにしばらく町を破壊する。

と、少し疲れたので周りを見回してみる。電波塔らしき鉄骨の塔が目に入る。その横のビルにも。

「あ、そこのビルはテレビ局だな？　メディアのクソども！　デマばっかり流しやがって、ぶっ殺す！」

テレビ番組の多くはＡＩが画像ごと合成している。人間のテレビ局はテレビ局をやりたいものたちが勝手にやっている。利益を上げる必要もなければ、別に本当のことを流す必要もないのでまあやりたい放題のクソの集まりとなっている。

もちろん吉川もそんなものは見ないが、たまに目に入って不快な気持ちにさせられる。

走り、電波塔のついたビルに体当たり。砕けるビル、倒れる電波塔。掴んで周りのビルに叩き付けまくる。別にこの世界のテレビ局がどういう放送をしているかなど吉川は知らないのだから八つ当たりもいいところだ――というか破壊しているビルの大半はテレビ局と関係ないし。

「オラオラ！　なんでも「ネットが悪い」とかクソまき散らしてるからこうなるんじゃい！」

わけのわからないことをいいつつ、電波塔を振り回す。

吉川の時代、ニュースなどはＡＩがやっている報道機関がちゃんと流してくれるのでこれも他の仕事同様人間がやる必要はない。人間のテレビ局は吉川の会社同様ある種の趣味でやっている物ばかりだ。だから当然デマや偏向報道なんのその、好き勝手嘘をまき散らして何の責任も取らないというもはや迷惑系の動画配信者でしかない物が大半となっている。そんなものは見なければいいのだが、**怒るために見る**という相当病的な人間が大勢いる、吉川もその一人だった。

ある種のマゾ的な視聴といえるかもしれない。

そしてその見えている地雷を自ら踏んだことによるムカつきを今自分で作ったバーチャルの世界のテレビ局に向けてぶつけている。全く意味不明の行動といえるだろう。

と、ババババ、と空気を切り裂く音。

ヘリが何台か飛んでくる。

ヘリは高さ五メートル、縦の長さ十メートル、プロペラの直径も十メートルぐらいと全体的な大きさが銀ワニの拳ぐらいはあるので、吉川には結構大きく感じられた。

――俺が小さいのか？　いや、あの怪獣映画の王様でも身長八〇メートルらしいから、百七十メートルの俺が小さいわけない。このぐらいの縮尺が普通なんだろう。

背丈ももちろん自分で設定した。実際の身長が百七十センチ少しなので、そのままメートルにして百七十メートルちょい。

怪獣の拳ぐらいのヘリから身を乗り出すのは、当然女子アナだ。パイロットもカメラマンも女、男は設定上にしかいない世界なのだから当然だ。女でカメラ「マン」というのもアレだが。

みな若く、女子アナは**もちろん顔で選ばれているので美人である。**

身を乗り出し、叫ぶ。

「皆さんご覧ください！　怪物です！　銀色のワニが暴れております！　しかし大丈夫！　この街には、無敵の超人、空手ウーマンがついております！　きっと空手ウーマンが我々を助けにやってきてくれます！　そしてこの、テレビ局を破壊する、報道の自由を踏みにじる悪魔を倒してくれるはずです！」

「空手ウーマンって……」

女超人が怪獣を倒しに来る、という大雑把な設定にしただけだ。吉川が直接決めなかったことは夢世界をコントロールしているＡＩが作ってくれる。あるいは組み合わせた怪獣物のコンテンツを作った人間が決めた設定がそのまま使われもする。

元の人間は男超人しか設定していなかったので、空手ウーマンはＡＩが作ったものだった。

そのセンスのなさに絶句しつつ、少し不安になる。

――空手か……女なら別に力で勝てると思ったけど、空手やってるんじゃ……いや、それでも所詮女。何とでもなるか。

考えているうちに、ついに巨大な風きり音。ジェット機の音どころではない。

音の方向を見ると、女。

女子校生ぐらいの女、もしかしたら大学生かもしれない。ただし明らかに背丈が大きい。背丈、な

どというレベルではない百メートルを余裕で超える大きさ。当然ながら、怪獣とサイズが合わされている。女超人といっても特別体が銀色でもないし角もない、百六十メートルの少女が水着を着ただけの姿だ。靴もはかず裸足である。

　それが地面を揺らして着地すると、ブルルンと吉川の娘並の巨乳も揺れる。

　ショートカットでいたずらっぽい目付きの、どこか猫を連想させる元気そうな娘。

　――おお、可愛いじゃん。これ犯していいのかー、夢の世界様様だな！　巨乳で結構可愛い……まあ、春のほうがかわいいけどな！

　これから女を犯そうというときによく娘のことなど考えられるものだが、まあ夢の中のバーチャルの世界だからだろう。

「空手ウーマンです！　鬼畜の腐れワニを退治しに、ついに我らが空手ウーマンがやってきてくれました！」

「ワニ、暴れるのはやめなさい！」

「おいおい、やめたとしたらなんだよ？　こんだけ町壊したのに許されるのか？」

「許すわ、二十四時間で直るから！」

「それ認識してんのかよ……それじゃ、別に止める必要ないような。あっ」

　踏み込む空手ウーマン、正拳突き。ブルンとビキニで包んだ巨乳を揺らして幻惑しつつ、回し蹴り。

　胸と太ももに食らい、眉をしかめる吉川。ワニなので眉はないが、眉のありそうな当りをしかめる。

「く……この」

　右腕を振り上げ、肩のあたりを適当に殴る。

　腕で受けて防御する空手ウーマンだが、体重の差でよろける。

　踏み込み、さらに殴るワニ。防御する腕を殴りまくる。

　――よしよし、この調子ならすぐヒロピンだ。ヒロインレ〇プ！　レ〇プレ〇プ！

「どうしたどうした。空手やってても、所詮女じゃこんなもんか？」

　膝をつく空手ウーマンに、胸を反らす吉川。

　目をカッと開く空手ウーマン。

「こいつ！　言わせておけば……これならどうだ、必殺空手ビーム！」

「あ？　ぐあっ！」

　両掌を前に突き出す空手ウーマン。その手平から閃光。光の奔流がワニの胴体を焼く。

　吹っ飛ばされる。

　ビルを薙ぎ倒し、山に背中を叩きつけられてようやく止まる。

「うぐぐぐ」

　――な、何が空手ビームだ、意味わかんねえ。で、でも、そんなすごいダメージ食らってないぞ……あ、そうか……胸反らしてるところに、斜め下から食らったから吹っ飛ぶのに力が使われたというか、弾かれたというか。正面から食らってたら、そりゃ必殺技だからな、たぶんヤバい。別に怪獣を強くは設定してないんだから。だって、男の俺のほうが強いに決まってるし……

「でたー！　必殺の空手ビーム！　終わった、これは終わった！　女性蔑視発言をさらりとかます腐れチン〇ンくん死亡！　腐れワニ死亡！　正義は勝つ！」

　ヘリが吉川の斜め上を旋回する。響く女子アナの声。

　体を起こす吉川。

「へ、まだまだ」

「く……この化け物め」

よろけつつ、近づく空手ウーマン。そう何発も必殺技は撃てないようだ。

接近戦。お互いダメージはある。

なら、自力で勝る吉川が押していく。

再び膝をつく空手ウーマン。

「く、殺せ……」

「あははは！　まあこんなもんだろ！　殺すなんてもったいないことはしないぜ、それより……いいことしようじゃん」

褌に手を伸ばす。

「あ、このポコチンくんまさか！　正義の女性超人に対して……許しがたい行為を？！」

「へへ、そのまさか……星中の女ども、こいつを見やがれ！」

本来の吉川の男の部分はやや大きめ程度、男にとってはやや大きめでも女から見れば誤差程度なので大きいとも気づかないだろう。

だがこの夢の世界では。

外される褌。

ビタン、と太ももを叩く太棒。拳のような先端部を付けた長大なものが太ももの間どころか、脛の間で揺れる。

「あああああ！　な、なんと……大きい！　銀ワニの雄の部分、ことのほか巨大で長い！　世界中に中継しているテレビではモザイクで見えなくせざるを得ませんが！　大きさはお分かりいただけるでしょう！　うわ、これ……ほんと大きい……今分析結果が……銀ワニは高さが百七十メートルほどで、そのチン……シンボルは、五十メートルを超えています！　バランス的に、背が百七十センチなら、ペ〇スの長さが五十センチ……そ、そんな……そんなの反則よ……」

女子アナが顔を赤らめる所までは吉川には見えない。

ただ、ヘリが高度を下げ、股間に近づいてカメラでしっかり撮るのはわかる。

股間を突き出し、少し揺らしてやる。大工場の巨大煙突のような肉の柱。その前を飛ぶヘリを見下ろし、頬を緩める吉川。

――へへへ、見ろよ。世界中の女ども。俺の超デカチンを！　ああ、この根元にかかる重さ……玉もリンゴ二つで、袋が切れそうだぜ。

笑う。その間にも、ゆれる巨棒。その前のヘリがガクンとバランスを崩す。悲鳴を挙げる女子アナ。

「ああっ！　五十メートル棒が揺れて突風が……少し離れて！」

「おっと、チ〇コ揺らしただけでヘリ墜落させるとかシャレにならねえな」

――ああ、この星の何億もの女が、俺のデカいのを見てるんだ。胸が熱くなるな……

ずしんずしんと足音を響かせ、巨棒巨玉をブルンブルンと揺らして突風を起こしながら空手ウーマンに近づく。

膝をついていた水着姿の巨乳女巨人。

目を上げて、頬を引きつらせる。

「ひっ、デカ……」

「へへへ、このデカブツが今からお前を倒すんだぜ」

「ああ！　一物が……立っていきます！　もうこれ、七十メートルぐらいない？　ペ〇スの長さ七十メートルって！」

「デカくし過ぎたかな……でも大丈夫、この世界の女は、俺のとやれるように設定してるから！」

「この変態が……ていうか」

　何とか立ち上がる空手ウーマン。

「あんた、男だったんだね。女性蔑視発言してたから、そうかもと思ったけど」

「女子アナはすぐ気づいてた感じだったけどな。っていうか、今は見りゃわかるだろ。それが……」

　と、大股開きで腰を突き出している吉川。

　すっかり油断していた。空手ウーマンが妻や娘と違い、全く金的攻撃に出る様子がなかったため、そういうのは無しなのだ、と勝手に思っていた。

　もちろん、そんなわけもない。

　彼女は相手が男だと知らなかっただけだ。

　女性蔑視発言におやっと思い、目の前でモノを見せ付けられて完全に気づいた。

　そして気づいたら。

　ニマ、と笑う空手ウーマン。目線はあえて吉川の顔。

　ヒュ、と音を立てて靴も履いていない足を後ろに軽く引き、がら空きの吉川の足の間に振り上げる。

「ほい」

「え、はぐっ！」

　ペン、と軽く爪先で銀ワニが股間にぶら下げている巨大ガスタンク二つを持ち上げる。

　ヘコ、と超高速で腰を引く吉川。

　が、もちろん当たった後では間に合わない。

「あ、ちょ、ちょ」

　真っ青になり、手を前に出す吉川。まあ顔色は銀色のままで変わらないのだが、内面としては青ざめていた。蹴られた物が引きあがり、ギュッと引き締まる。眩暈と吐き気が襲ってくる。

　そして何より、蹴られた睾丸だけではなく腹の中、内臓までに広がる圧倒的苦痛。

「あ、が、が」

　うめく。

　ヘリから女子アナの叫び声。

「あー！　金的です！　金的攻撃です！　空手ウーマン、クソワニの丸出しの金の玉を蹴った！　男のお股でぶら下がる、二つの肉のボールくんを蹴った！　腰を超速で引くワニ！　木刀みたいに揺れるデカチ〇コ！　そこは無しでしょ、って情けない顔のワニ、顔が引きつってます！　ありに決まってんだろが！　か弱い女の子にはね、あんたら男と喧嘩する時にはキ〇タマ蹴る権利があるのよ！　おーっと、空手ウーマンチ〇ポを掴んだ！　片手じゃ握れないぶっといチ〇ポを、両手でがしっと掴みます！　そして蹴ります！　金的を蹴ります！　押さえる手ごとワニの股間を蹴り上げる！　目を剥くワニ！　すごく痛そうです！　でも私にはわかりません！　ご覧の女性の皆さんも同じでしょう！　なぜなら私たちには……」

カメラの女性を見て、ニマっと笑う。

カメラが女子アナの股間を映す。スカートをめくり上げ、派手な下着を見せる女子アナ。カメラには文字通り穴しかない女子の股間の形がパンツ越しに映る。

「この通り、金の玉はありません！　私のここにあるのは女子穴だけ！　女子アナだけにね！」

もちろんそれは一瞬、すぐにカメラは戦う二人に。

「うごおおおお！　こ、このおおお！」

痛みに耐えつつ、手足を必死で振る吉川。妻子がドＳ女子で金責めに慣れているせいか、わずかに暴れる余力があった。

「あっ」

空手ウーマン、眉をしかめて飛び離れる。

「あたっ……」

「くふううう、おおおおお」

股間を押さえ、腰を引いて悶える吉川。汗を噴き出す。

その前で空手ウーマン。

「空手ウーマン、どうしたんでしょう！　今打撃を受けたんでしょうか、心配です」

「あー、大丈夫です。だって当ったのは……」

　ぺし、と水着の股間を叩く。

「ここですから！」

「股間か！　なら安心です！」

　ダブルピースの空手ウーマン。

　悶える吉川。

　ヘリが二人の前を飛ぶ。

　両手で押さえられた股間。

　腰に手をやって、突き出された股間。

「同じく股間に攻撃を受けてしまった空手ウーマンとクソワニ！　状況は互角、状況は互角、状況は互角う！　この先、勝負は全くわかりません！　ぎゃははは！」

　噴き出す女子アナ。カメラ女子も女性パイロットも肩を震わせる。

　そこまでは見えない吉川だが、女子アナと目の前の空手ウーマンが笑っているのはわかる。プルプル震える空手ウーマンの水着に包まれた二つのスイカを見つつ、頬を引きつらせる。

「く、く、この……卑怯なクソマ〇コめ……」

「あは、なんでタ〇キン蹴られた男って、腰グネグネさせて踊りだすの？　痛みがましになるの？　そのキ〇タマダンスでさー」

「舐めんじゃねーぞ、俺にも、必殺がある。食らいやがれ！」

　言ってから思い出す。

　自分の必殺技として設定した攻撃を。

　口から火を吐くわけではない。

　空手ウーマン、手からビームで殺す。

　銀色ワニは一物からの毒汁で殺す。

　――し、しまった……俺の技,『俺の両玉はガスタンク』は立ったチ〇コからだ……今、キ〇タマ蹴られてチ〇コは……いや、ギンギンですけどね？　いわゆるバグ勃起。でも、これを無防備に敵に向けたら速攻で玉蹴られる。なんでこんな場所から出すことにしたんだ……いや、それは俺の趣味的な奴と、不利な形の技ほど威力が高まるというリスクがバネになる異能者バトル物にありがちのアレで、勃起チ〇ポから出すという制約をつける代わりに威力を引き上げ、倒した女超人は死なないで、無抵抗で発情するという特殊効果を付けたんだった。

　異能者バトル漫画が大好きな吉川は怪獣物にナチュラルにその要素を持ち込んでいた。彼が設定するのだから別に楽に出せる技に同じ効果をつけることもできるのに、わざわざ制約をつけるのは、簡単すぎても面白くないと考えるからだろう。

　ちなみに、今入っている夢の設定はもちろんその夢の中からはいじれない。難しすぎると思っても、修正できるのは一旦目覚めてからだ。

　不利な技でも、頼るしかない。

　吉川の技が制約が重すぎて使いにくい物だなどと知らない空手ウーマンは慎重に身構える。

「怪獣にも技ぐらいあるよね、なに？　火でも吐くの？　ま、金的キックよりゃ威力ないでしょうけど！　女の子の必殺技、おキンキンキックよりは！」

「へ、へへ……食らってからほざけよ……食らえ、男の大砲！」

反り返る巨棒を掴み、空手ウーマンに向ける。そんな動きを見せれば初見でもそこから出すとわかってしまう、やはりかなりまずい形の技といえるだろう。

「ひっ」

必殺技が出ると知っているわけではないが、反射的に横跳びでかわす空手ウーマン。

ブルンと横に揺れ、着地とともに下に揺れる巨乳。

その前を、巨棒から噴き出す白い液体が掠める。必殺技なので速度もあり大量だが、光線ほどの速度はない。

ベシャ、と廃墟に降りかかる。

ヘリから女子アナの声。

「ああ！　射精、射精です！　なんとクソワニ、突然の射精！　キ〇タマ蹴られておかしくなったようです！　これはお仕置きしかない！　みっちりと金の玉にお仕置きして躾けるしかない！　もしくは去勢！　両睾丸破壊で去勢しかない！」

女子アナの叫びの中、眉を吊り上げる空手ウーマン。

「このがきゃあ、まさか射精しやがるとはね……」

「く、このクソマン……あ」

　とん、と軽く跳び、爪先を跳ね上げる空手ウーマン。ペン、とまたも押し上げられる巨肉玉二つ。

「あがっ！　ちょ……」

　股間を押さえる。と、踏み込んだ空手ウーマン、片手で巨棒を強引に掴む。太さ的にまともにつかめないが、爪を食いこませるように無理やり掴む。

「あぐっ、ちょ、強すぎ……」

「あら、ごめんねー、それじゃお詫びに……」

　すい、と足を吉川の足の間に滑り込ませる。すべすべした太ももにびくりと震える吉川。

「おもっくそ膝金蹴りして、手の防御ごとキ〇タマ破裂させてあげるね」

　竿の先は横に向けられ、もし連射できてももう当てられる状態ではない。

「あ、やめ……あぐっ！」

「ほーらほら、キ〇タマキ〇タマ、キ〇タマ！」

「あがが！　おぐっ！　はがっ！」

「おーっと、金蹴り、金蹴り、金的蹴りの嵐です！　膝金、膝でキ〇タマを押し潰す、最も睾丸を破裂させてしまいやすいといわれる、女の必殺膝金蹴り！　女の華奢な膝の骨でも、男の腰の骨と共同作業ならその男のタマタマを潰せるといわれています！　タマタマを潰せるといわれています！」

「おぐあおおおお！　ちょ、もうやめ……やめてくださいっ！　玉が潰れるっ！」

「大丈夫よ、死んでも生き返るし、怪我なんてすぐ治る世界なんだから。キ〇タマ潰れるぐらい平気平気、痛いだけ」

「その「痛い」が、死ぬほど痛いんだよ！　玉無しクソマ〇コには一生わからねえだろうがな！　はがっ！」

　ぐちょ、と一際勢いよく膝を吉川の肉袋に減り込ませ、そのままゴリゴリと膝で袋を磨り潰す空手ウーマン。

「あごおおおお、ちょ」

「ほれほれ、キ〇タマ潰れろ、キ〇タマ潰れろ、女を見下す男性様の金の玉潰れろー」

「こ、このっ」

　膝。

　正面から向かい合っているので、吉川の膝も同じように空手ウーマンの股間を狙える。

　ベシ、と割と勢いよく膝を跳ね上げる吉川。度重なる急所攻撃を受け続けてきた割りに、まだ攻撃の形ぐらいは取れる。

「あっ、いた！」

「おーっと！　クソワニマン蹴り！　お返しだとばかりに女の子のお股を蹴り返す！　女でも、お股をやられりゃ結構痛い！　でも……男の股間と比べたら、女の股間は万倍強い、だってここには……」

　カメラを見て、ニマっと笑う女子アナ。

　見ている世界中の女たちも、多くが笑ってぺしっと股間を軽く叩く。軽くだが、それは女の感覚での話。男なら、自分では一生無理な勢いで叩いている。

「ここにはボールがないからね！」

　言いつつ、水着の前をずらして割れ目を見せ付ける空手ウーマン。

「く、この……あっ」

「でもお返しはするよ！」

　掴みかかる空手ウーマン。吉川の両手を掴み、力の入らないそれを股間防御から引き離す。

「ちょ、やめ！　玉だけは……あっ！」

　無防備で揺れるガスタンク二つ。反り返る七十メートル雄棒。

　無防備なガスタンクをグニグニと押し上げる女の膝。

　周りを飛ぶヘリ。女子アナが絶叫する。

「これはとどめが来ます！　頑張れ空手ウーマン！　潰れろ潰れろ金の玉！　女は全員望んでる！　お前の男が終わるのを！　女がみんな見たいのは！　キ〇タマ潰れた時の顔！」

「えへへ？　覚悟はいい？　潰すよ？　ガチで潰すからね？　あんたのコーガン、コ・ウ・ガ・ン」

　頬と頬を合わせ、密着しながら熱い息を吐いて囁く空手ウーマン。

「うわああ！　やめ、やめ……あっ」

「キーン！」

「あがっ！」

　半ばジャンプし、膝を跳ね上げる空手ウーマン。ごちゃ、と勢いよく減り込む女の膝。ブチュ、と頭の中で嫌な音が響くのを吉川は確かに聞いた。

「やったー！　決まった！　必殺のゴールド！　必殺のゴールド！　空手ウーマンの跳び膝蹴りがクソワニのおキ〇タマに炸裂！　泡を吹くクソワニ、崩れる！　おーっと、空手ウーマンが倒れたクソワニを仰向けにして、股間を開かせる……そして……おお」

　大股開きで泡を吹く吉川。

　その肉袋を両手で引っ張って広げる空手ウーマン。

　中身はある。だが不定形で、形を保っていない。

　ニマ、と笑ってヘリを振り返る空手ウーマン。

「はい、見ての通り、クソワニの両睾丸破裂、去勢完了です！」

「おーっと！　カメラ寄せて！　こいつの顔と、潰れた金袋を交互に、もっと近くから！　世界中の女性の皆さん、ご覧ください！」

実際、相当数の女性がその画像を見ていた。

そして、吉川は知らないが彼が組み合わせたデータの一つを作った男がかなりのドMで、女全員を金責め好きに設定していた。吉川はそんなことは考えもしないので、そのまま設定を使っている。

家で、雑踏で、職場で、さまざまな場所でテレビを見ることができている女たち。

星全体の、百億ほどの女のうち、八割ぐらいはその映像を見ていた。

みな、若いドＳ女たちだ。じっとり濡れた下着に手を入れつつ、熱いため息をつく。

自分も一度でいいからそんなガスタンクのような巨大睾丸を潰したいものだと思いつつ。

同時に、そんな風に潰れる内臓を外に出していない今自分が触っている部分が明らかに今テレビに映っている部分より勝っていると感じ、優越感に浸りつつ。

ともかく、こうして吉川の初戦闘は完全敗北で終わった。

五回勝てば夢は終わる。

逆に言えば、勝たなければ終わらない。

銀ワニが男だとばれたからには、次の戦いからは初めから女超人たちは金的を狙ってくるだろう。

ヒロピンどころか、女超人による金的地獄が幕を開けた。

体験版終わり

この後、男吉川、自分が作ったバーチャル世界から全く出られず、年単位で女超人たちに金的負けを続け、就職し、女と同棲し……と望んだ「怪獣として女超人を返り討ちにしてヒロピンレ〇プ」とはかけ離れた金責め暮らしを続けます。

続きは製品版でぜひお楽しみください。